

優秀な人材を送り出すのは教育制度？

世界の IT 業界を席卷する IIT

国立研究開発法人 科学技術振興機構
インド代表 西川裕治

著しい人口ボーナス期インド

5月号でも紹介したが、最近グローバルに活躍するインド人の名前を頻繁に耳にする。つい最近も日本の民放で、「インド工科大学 (IIT)」(写真1・2)の入学競争や企業の採用面接風景などが紹介された。インドといえば、「〇〇〇印度カレー」くらいしか知らなかったわが世代には隔世の感がある。

インドの人口は日本の10倍、そして人口の約半分が24歳以下であり、10歳から24歳までの若者人口が3.5億人を超えている。一方、日本の20歳代は1300万人以下で、インドはざっと日本の20倍以上もの「稼ぎ手」が控えていることになる。インド人は「3けたの掛け算が暗算でできる」という神話も生まれるほど数字・数学に長けた人材を輩出してきた。実際にレストランで70歳過ぎの老オーナーが、伝票の合計を暗算で正確に計算して客を驚かせることがある。むろん「暗算ができれば数学ができる」というつもりはないが。

インドの教育制度はどうなっているのだろう

か。日本では小・中・高校で $6+3+3=12$ 年だが、インドは $10+2$ （詳しくは $5+3+2+2$ ）と同じく12年。最初の10年が基礎教育で、次の2年間は理系、文系に分かれて受験準備に集中する。授業料が無料の義務教育は最初の8年間で、日本より1年少ない。

そこでものをいうのが10年目終了時の卒業統一試験と、12年目の最終試験の点数だ。この点数で進学できる大学がほぼ決まる。

目標は世界最難関大学 “IIT”

IITを筆頭とするトップ大学の入試は熾烈^{しちつ}を極める。12年生最終試験でトップレベルに入ったものが超難関大への共通試験として受験するのがJEE (Joint Entrance Examination)-Mainという試験。この段階で受験者は120万人超(全員がIIT狙いではないが)。そこで上位15万人がJEE-Advancedという試験を受け、最終的にIITに受かるのは1万人のみ。受験生の通う受験塾は、JEE-Mainを受かっただけで、その生徒の顔



(写真1) 超名門 IIT デリー校の本部ビル



(写真2) IIT デリー校のバイオ医学研究チーム（右から4人目が筆者）